

とく  
徳

ほう  
朋

しゅうかつ しゅうかつ  
終活と宗活

雲井 一久



くもい かずひさ  
1970—現在  
神奈川県生まれ。真宗大  
谷派真照寺。産業カウ  
ンセラー

「今までは、他人が死ぬとは、思いしが、俺が死ぬとは、こいつあたまん」

これは大田南畝<sup>おおたなんぼ</sup>という人の言葉と聞いています。この方は「蜀山人<sup>しよくさんじん</sup>」という号をもっています。南畝<sup>なんぼ</sup>は江戸の幕府の役人であり、狂歌師<sup>きやうかし</sup>でもありました。(中略)南畝<sup>なんぼ</sup>は七十四歳で亡くなりました。この歌を詠んだのは、余命宣告をされた時だと伝わっています。

余命宣告をされてびっくりされたわけですね。今まで死ぬとわかっていただけ、それは「他人が死ぬ」という他人事であった。しかし、自分が余命宣告されたら、「こいつあたまん」と他人事にできなくなったのです。死が自分の事になったのです。私自身も、日常は死を他人事にしています。しかし、必ずこの身に死は訪れるのです。

この歌をいただくと、思い出す方がいるのです。ご門徒さんで、Iさんという方がいらっしゃいました。この方は三年前に亡くなられました。お会いした時にはすい臓がんであることが発覚し、余命宣告をされていました。(中略)最初のうちは、七転八倒<sup>しちてんぱつとう</sup>されていました。まさに「こいつはたまらん」です。しかしもう免れ<sup>まぬが</sup>ないと知って、残された時間を思い残すことなく過ごそうと思われたのです。

家族に迷惑をかけぬように、身辺整理と相続の手続きをされました。そして自分がやりたいことをしました。旅行や、自分の趣味、家族と充分すごすこと、いわゆる悔いのない終活<sup>しゅうかつ</sup>を

していたのだとIさんはおっしゃいました。しかしIさんは言うのです。お墓の用意やお葬式の手配まで自分でした。思い残すことがないようにリストを作って全部消すことができた。けれども、これで充分だと言えないと言うのです。Iさんは細やかな方ですので、はたから見れば完璧に終活しゅうかつをされたのです。しかし、何か残るものがあるとおっしゃるのです。

「残ったものって、一体何ですか」とお尋ねたずしたら、「全部やり切ったと思ったけれども、自分の問題が残った」とおっしゃるのですね。そして「余命を宣告されて、自分なりにやることはやってきたし、やれたのは嬉しい。しかし、それが満足なのだろうか。そう思うと不安でたまらなくなる」と項垂うなだれるのです。

Iさんがおっしゃりたかったことは、自分が生きてきたこと、死んでいくことに意味を見出したいということでした。「仏教では何と言いますか。どう解決するのですか」。そういう会話が亡くなるまでの三か月の間、続きました。

いくら終活しゅうかつをして、自分の周りを固めたとしても、残る問題がある。そういうことをIさんは教えてくださいました。こういう問いは、日常の心ではなかなか出てきません。ですから、これは仏さまの心、仏さまからの問いかけと言えるのではないかと思うのです。

つまりIさんは、「終活しゅうかつ」を通してこれまでの「宗むね」が問われたということなのでしょう。自分の死を前に身近な問題を整理される中で、これから何を「宗むね」としていくのか、確かな宗むねとは何かという問いが出てきたのだと私は受け止めています。

(『終活しゅうかつと宗活しゅうかつ』)

宗むね (むね)・・・よりどころとするもの。宗活しゅうかつとは本当のよりどころを見つけていく事。

この「徳朋とくほう」は仏教を拠り所よとしている方々の言葉に直じかに触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。

